



【品性訓練(6)喜び!その中に含まれた祝福の法則】

今日の聖書本文:ピリピの手紙4章4-7節/暗唱聖句:ハバクク書3章17-18節

説教者:鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!一週間も主にあって喜びはクリスチャンの表紙であり、顔です。喜びはクリスチャンが味わえる特権です。喜びがない信仰生活、喜びのない教会生活は普通ではなく、健康でない証拠です。なぜなら、主イエスキリストを信じ、神の御言葉に従う者には喜びが溢れるようになるからです。イエス様はこう言われました。“わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、

わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。(ヨハネの福音書15:11)”

喜びはクリスチャンの大切な品性であり、美しい品性です。今日は喜びの手紙と呼ばれている使徒パウロによって書かれたピリピ人への手紙(喜び・喜ぶと言う言葉が16回以上書かれている書)ととおして喜びの品性について一緒に学んでいきたいと思ひます。今日の御言葉を通して我々がますます喜びの人、喜びの教会となっていけますように切に祈ります。

<1.環境を超越した喜びの人々>

イエス様に似た品性を持っていた代表的な人は使徒パウロです。彼は喜びに満ちた生き方でした。パウロの持っていた喜びは単に感情的に感じる程度ではありませんでした。パウロがピリピ人への手紙を書いているところはローマの冷たい牢獄ですが、なぜかピリピ人への手紙はすべて喜びに満ちています。ひたすら喜びという単語が続けて書かれています。自分も喜んでいるだけではなくピリピの教会の信徒たちにさえも“喜びなさい”と言っています。パウロは牢獄の中でも喜んでいました。ローマの牢獄は環境の一番わるい恐ろしいところでした。それにもかかわらず彼は喜んでいました。牢に入っているのにもかかわらず福音が広がっていることだけで喜びました。パウロはイエス様のため喜び、イエスにあって喜びました。我々の品性はどんな環境にまで喜べるのか、そしてなんのために喜んでいられるのかによってよく決められます。この世の快樂のため喜んでる人を我々は尊敬しません。それを喜びよりは楽しみと言ひます。楽しみと喜びは違ひます。そして我々の品性はだれのために喜ぶのかによって決まります。パウロはイエスにあって喜んでいました。旧約のハバククという預言者もどんなに苦しい環境においても神様にあって喜びました。

ハバクク3章17-18節です。“そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。”旧約のハバクク預言者は経済的にとっても苦しい環境に置かれていました。しかし、彼は救いの神様にあって喜びました。幸せになりたいなら幸せな人々をよく観察し、彼らから幸福の秘訣を学ばなければなりません。

喜びに満ちた生き方をしたいなら喜びに満ちている人を観察し、その喜びの秘訣を学ばなければなりません。使徒パウロが喜びの人になったのは自然にできたわけではありません。パウロも喜びの秘訣を学びました(ピリピ4:11-12)。

喜びの表し方を学び、主にある喜びを心に決め、喜びの敵である思い煩いを克服しました。彼の喜びはイエスにありました。同時に彼の喜びは靈的訓練をとおしてきよい習慣による実でした。使徒パウロは喜びに満ちた生涯をおくるために喜びの障害物を取り除きました。

<2. 喜びの障害物>

喜びに満ちた人生をおくるために我々も何が喜びの障害物になるのかよく知る必要があります。自分が不幸だと思っていることはだいたい喜びの障害物のせいです。愛する信仰の家族のみなさん!我々を喜ばせない障害物は何でしょうか。

一つ目、環境が喜びをうばう障害物にもなる時があります。

人間は環境に左右されます。良い環境に会うと喜び、悪い環境に会うとダウンしてしまいます。使徒パウロは自分の環境をこのように記録しています。“私がキリストのゆえに投獄されたい、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり。”(ピリピ1:13) いまパウロの環境は牢獄です。くさり縛られています。パウロがこのように自分の環境を明かす理由は人間は環境の影響を受けざるを得ないことを示しています。

パプテスマヨハネのようなすばらしい神の人でさえも牢屋に閉じ込められている間、疑う心が生じてしまいました。それで自分の弟子たちをイエス様に送って“来られる方があなた様でしょうか。”と問いました。それほど環境は我々の感情に影響を与えます。しかし、パウロは環境を乗り越えています。さらに、われわれにも環境の奴隷にならないようにも進めています。パウロは牢屋にいるという考えを乗り越え、イエスにあって生きていることを知っていました。彼は環境の焦点を牢屋ではなくイエス様においたのです。

二つ目、人が喜びを奪う障害物になる場合もあります。

人は喜びを与えると同時に心の痛みをも与える存在です。事実我々を苦しめられるのは環境より一番近くにいる人です。人間の幸福は関係に関わっているため一番近くにいる人々と関係が崩れる時人生が苦しくなります。遠くにいる人々より近くの家族や、教会の人々、隣人などが我々の喜びを奪ってしまう時もあります。使徒パウロはピリピの教会の人々の間、争いがあることを知っていました。特に女信徒の間に不和があることを知っていました。そういうわけでこのように記録しました。“ユウオデヤに進め、ストケに進めます。あなたがたは、主にあって一致してください。”(ピリピ人への手紙4:2)”

パウロを殺さないと食べも、飲みもしないと言っている40人に会った時もあります。彼には敵が多くありました。自分を落胆させる多くの人に会いました。ある人々はパウロを苦しめるためにたたかってキリストを伝えることもありました。しかし、パウロ

はそのすべての人にもかかわらず喜べる秘訣を学びました。むしろパウロを苦しめる人々のおかげでキリストの福音がさらに前進されていることを喜びました。ピリピ人への手紙1章17-18節を読んで見て下さい。

“他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私を苦しめるつもりなのです。すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。”

三つ目、思い煩いが喜びを奪う障害物です。

現代人の一番の敵があればそれは思いわずらいです。みなさん。いちばんたくさん売れている薬が神経安定剤であることをご存知ですか。世界的に大量の神経安定剤が売れています。それほど、今日の人々は思い煩っているのです。過去のどの時代よりも楽で豊かになっているのにもかかわらず、どの時代よりも心配を多くする時代になっているようです。我々の思いに心配が満ちています。思い煩いが習慣になってしまった人々が多くあります。思い煩いは“心が分かれる”という意味です。そして“首をしめる”という意味もあります。思い煩いは我々の心を分け、苦しめるものです。

パウロはピリピの信徒たちに喜びを奪ってしまう思い煩いが多くあって喜べないことを知っていたためこのように進めています。“何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。”(ピリピ4:6) イエス様も思いわずらいがどれほど深刻な問題だったのかよくご存知でした。そういうわけでマタイの福音書6章で思い煩わないで生きる秘訣と重要性を教えてくださいました。思い煩うことでなされるものはなにひとつありません。“あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。(マタイ6:27)”そして心配は不信仰の表現でもありません(マタイ6:30-31)。心配しない一番大切な秘訣は“思い煩わないと心に決めること”です。この思い煩いの障害物を取り除く時我々は喜べます。

四つ目、物質が喜びを奪う障害物になる場合もあります。

貧しさを味わったことがない人は分かりません。経済的に苦しんだり、破産した人々にやってくる経済的圧迫は心の喜びを外に追い出す役割をします。貧困は罪ではありません。しかし、貧困が与える不便さのため喜びを失うときがあります。そのストレスのため心の余裕を失い、喜びを失う時があります。ピリピの信徒たちの中でも金銭的に苦しんでいる人たちがいたようです。使徒パウロは彼らをこのように慰めます。

“また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいませ。”(ピリピ4:19) 実際使徒パウロも経済的な苦しみを経験した人でした。しかし、彼は貧しさを乗り越え、喜べる秘訣を悟りました。我々の喜びを奪うことは貧しさだけではありません。富も我々の喜びを奪うことはできません。金持ちになればみんなが幸せになれると思いますか。賭博にはまってしまった人々の姿を見て下さい。彼らは緊張していて、深刻な顔をしています。彼らを見ている人々さえも深刻になります。正当な方法でないやり方で得たお金は喜びをとまいません。口にあって一躍金持ちになった人が幸せになった例はあまりありません。そしたら金持ちになることは悪いことでしょうか。そうではありません。正当な方法で熱心に努力して金持ちになり、価値あることにお金を使うならそれは尊いことでしょう。つまり、それには豊かなときさえも物質に執着しないでまことの喜びに留まるべきであることを教訓として得ることができます。パウロは貧しさと豊かさにかかわらず喜べる秘訣を悟りました(ピリピ4:11-12)。我々もその秘訣を学ばなければなりません。もちろん自然にできるわけではありません。これは学ばされるべきあって、訓練次第です。

<3.喜びの秘訣:主にあって我々は喜べます。>

するとどうすれば喜びの障害物を取り除いて喜びの人生をおくることができるでしょうか。

使徒パウロがすべてを超越して喜べたのは彼が主にあっていただけからです。彼はピリピ人への手紙を牢屋で書きましたが、彼自身は牢屋ではなく主にあるのだと考えました。場所の心理学があります。場所がある程度幸福をもたらしてくれるということです。もちろん場所を無視することはできません。人間である以上環境の影響を受けざるを得ません。しかし場所と環境を超越することのできる道があります。それは主にとどまることです。

“いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。(ピリピ4:4)”

置かれた環境だけではなくパウロの体には肉体のとげがあって彼をいつも刺していました。パウロの人生は苦難の連続でした。しかし、彼がキリストにあるのみに自分の弱ささえほこりとなり、喜べるのだと告白しています。

“ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからです。(第二コリント12:10)”

使徒パウロは主にあって大いに喜んでいきます。

“私のことを心配してくれるあなたがたの心が、今ついによみがえって来たことを、私は主にあって非常に喜んでいきます。あなたがたは心に掛けてはいたのですが、機会がなかったのです。(ピリピ4:10)”

パウロが経験した喜びは神様から与えられた喜びでした。神様から与えられる喜びはこの世のあらゆる喜びを越える喜びです。神様の栄光をみる喜びであり、神様の臨在の中で味わえる喜びです。神様が我々の心におかれた喜びはこの世のものとも比べられません。

ダビデも神様から与えられる喜びを経験した後、このように告白しています。“あなたは私の心に喜びをくださいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。”(詩篇4:7) ダビデの喜びは神様をいつも彼の前におく喜びでした。“私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。それゆえ、私の心は喜

び、私のたましいは楽しんでる。私の身もまた安らかに住まおう。”(詩篇16:8-9) 彼はつづけて告白します。“あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。”(詩篇16:11) 我々が喜びを回復し主の喜びを味わうためにはイエスにとどまらなければなりません。

イエスにとどまることは何でしょうか。我々が神様の御言葉を読み、黙想する時もそうですが、使徒パウロは特に祈る時主にとどまることを示しました。イエス様が我々に備えてくださった喜びの中の一つは祈りの答えへの喜びです。我々は祈りをおしてイエス様が約束された喜びを経験します。祈って、こらえられた時、我々の喜びはさらに増し加えられます。

“あなたがたはいままで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの、喜びが満ち満ちたものとなるためです。”(ヨハネ16:24) 我々のもっている問題にたいして心配すればするほどその問題は解決に向かうのではなくさらに大きくなってその問題に捕らえられるときがあります。しかし、我々の心配と問題を祈りにかえれば、それを神様にゆだねることができます。祈れば神様の答え、助けに関心を持つようになります。そうすることによって我々は神様を喜ぶことになります。神様を喜ぶ時、すべての問題を克服し喜べる力をも同時に得られることを覚えましょう。“きょうは、私たちの主のために聖別された日である。悲しんではならない。あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。”(ネヘミヤ記8:10中) つまり、“主を喜ぶことは、あなたがたの力である”ことを覚えましょう。

愛する信仰の家族のみなさん！喜びは努力の産物の以前いのちの実です。御霊の実の中での一つが喜びです。ですから我々は御霊に頼らなければなりません。イエス様は御霊によって喜ばれました。

“ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。」”(ルカ10章:21節)。イエス様が聖霊によって喜ばれたならば我々も聖霊によって喜べます。聖霊がくださる喜びは純粋な感激と感動です。きよい楽しさであり、高次元の幸福です。聖霊がくださる喜びは強烈で、そそのかす快樂ではありません。内面からわき出る静かな充満さであり、泉からわきでるような感激です。

<まとめ>

喜びを表す方法は人によってさまざまかも知れません。ある方は言葉で、文字で、平和の沈黙で、感情の表現で、歌で、プレゼントで、どんな姿でもかまいません。だれが成熟した人ですか、だれが美しい品性をもった者ですか。環境を超越し、人間関係を超越し、物質のあり、なしを越え主によって、主にあって喜べる者でしょう。そのすべてを越えて、イエスのため喜び、祈りを通して、祈りの答えで喜び、イエスにあって喜び、御霊にあって喜ぶ、喜びに満ちたみなさんの信仰・教会生活、喜びの人生となりますように主の御名によってお祝福します。アーメン!